

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の4年目)

1. 研究課題

21世紀の人文科学

Humanities in the 21st Century: An Attempt at Understanding Our Age

2. 研究代表者氏名

岡田暁生 小関隆 佐藤淳二

Akeo OKADA, Takashi KOSEKI, Junji SATO

3. 研究期間

2018年4月-2022年3月(4年目)

4. 研究目的

本研究の狙いは次の三点である： 1：私たちが今生きている、この息苦しく先が見えない世界 — それは一体なんであるのか、そしてそれはいつ始まったのかについて、それを「Humanities の危機」という相のもとに問う。それは同時に「21世紀の人文科学 Humanities の可能性」についての存在論的問いともなるはずである。 2：本研究は必然的に、同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、人文科学固有のアプローチを目指すこととなる。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が中心となる。その際に1970年代が一つの焦点となるであろう。 3：本研究のもう一つの焦点は芸術である。すなわち「人文科学の危機」と「芸術の危機」を、「人間性の危機」という点で同根のものとして想定し、単に1970年代以後の芸術を研究対象とするのみならず、芸術創作に携わる人々との連携を深め、そこから人文科学の可能性についての示唆を得ることを目標とする。本研究班は、歴史・思想・芸術という人文科学研究の三本柱の間の密接な連携を深めるべく、敢えて岡田暁生・小関隆・佐藤淳二という三人の班長を立てることとする。これは、一人の班長（そしてその専門分野）へと研究成果を一元的に収斂させず、ディシプリン間の真の融合を目指すという意志を示すものである。

1. What is the current world in which we have been living without clear outlook for future? When did our age commence? These are the primary questions the project would investigate. The main hypothesis the project posits is that our age has been an age of the crisis of humanities. The hypothesis implies an inquiry into the validity of humanities as a distinct academic field in the 21st century. 2. In its examination of our age the project would adopt a historical approach. It is expected that the 1970s, a likely starting point of our age, will be a period to be most intensively examined. 3. The project would pay much

attention to the field of art, for the crisis of humanities and that of art seem to be two faces of the same phenomenon. The collaboration with artists is one of the characteristic aspects of the project.

5. 本年度の研究実施状況

コロナ禍の到来は、本研究班にある種の仕切り直しを要請するものであった。ある種の「抜き打ちテスト」としてのコロナ禍は単に新型コロナウイルスによるパンデミックを引き起こしただけでなく、現代社会が抱え込むさまざまな「暗部」を顕在化させたのであり、それに伴って、人文学にはこれまでの研究がいわば「暗黙の前提」としてきた数々の想定が根底的に揺らいでいることを直視し、それを再審して、とるべき方向性を模索することを求めているからである。私たちが直面しているのはパンデミックをその一部とする「2020年問題」に他ならない、「2020年問題」全体に対峙せずして先の展望は開けない、という認識に立脚して、今年度はあらためて「人文学 beyond 2020」という総括的なテーマを設定し、哲学・思想や歴史学の領域における新たな可能性を考える趣旨の報告を連ねた。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-24 人文学 beyond 2020 切腹・沈没・大予言：1970年と1973年を中心に 発表者 片山杜秀 慶應義塾大学

2021-05-22 人文学 beyond 2020 歴史学 beyond 2020 の可能性 発表者 小関隆 京都大学 (人文研)

2021-06-07 人文学 beyond 2020 合評会：斎藤幸平『人新世の『資本論』』 コメンテーター 佐藤淳二、藤原辰史 京都大学 (人文研)

2021-07-31 人文学 beyond 2020 ディスインフォメーション：分裂するアメリカの過去・現在・未来 発表者 中野耕太郎 東京大学

2021-09-25 人文学 beyond 2020 人間と世界の新たな語り方：多様性と普遍性をめぐる合理性と創造力 発表者 田辺昭生 東京大学

2021-10-16 人文学 beyond 2020 現代世界の「恐れと憐み」のゆくえ：エディプス悲劇以後の人文学 発表者 上尾真道 京都大学 (人文研非常勤研究員)

2021-11-27 人文学 beyond 2020 台湾から考える世界史：全体主義の時代を生き延びるための知恵と勇気を求めて 発表者 駒込武 京都大学

2021-12-06 人文学 beyond 2020 危機の時代を歴史学はどう語るか：ジェフリー・パーカー『グローバル・クライシス』をめぐって 発表者 小山哲 京都大学

2022-02-22 人文学 beyond 2020 日本近世社会から現代社会を見ると …：「生きづらい社会」における「豊かな人」 & Beyond 2020 の日本経済史研究に向けて 発表者 岩城卓二、小堀聡 京都大学 (人文研)

2022-03-07 人文学 beyond 2020 20世紀史を書くとはどういう所業なのか？：Konrad H. Jarausch, *Out of Ashes: A New History of Europe in the Twentieth Century*

(Princeton UP, 2015) をめぐる雑感 発表者 橋本伸也 関西学院大学

2022-03-26 人文学 beyond 2020 総駆り立て体制、制御（コントロール）社会、一般的等
 価性：現代についての哲学者たちの診断から 発表者 上田和彦 関西学院大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岡田暁生、佐藤淳二、小関隆、森本淳生、藤原辰史、立木康介、藤井俊之、伊藤順二、上
 尾真道

学内

吉岡洋(こころの未来研究センター)

学外

王寺賢太(東京大学文学研究科)、長谷川貴彦(北海道大学文学研究科)、中野耕太郎(東京
 大学教養学部)、田辺明生(東京大学教養学部)、三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、上
 田和彦(関西学院大学)、橋本伸也(関西学院大学)、坂本雄一郎(関西学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	6	9			1		35			7	
国立大学	4	5					31				
公立大学	1	3				1	8				5
私立大学	2	3					9				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他 ※											
計	13	20 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	83 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (0)	5 (0)

※「その他」の区分受
 入がある場合
 具体的な所属等名称を
 記載：例) 高校教員
 無所属の場合は機関数 0 とカウ
 ントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	6			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
ZINBUN	1	R4. 3	European Crisis in Historical Perspectives	Takashi Koseki & Serena Ferente
ZINBUN	1	R4. 3	Introduction	Atsuo Morimoto
ZINBUN	1	R4. 3	Du “ Non-humain ” au “ Post-humain	Atsuo Morimoto
『アレ』 vol. 10	1	R3. 11	「食べること」と「信じること」	藤原辰史
思想	1	R4. 2	〈序言〉「民主主義の危機」と向き合う」	橋本伸也

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
思想	1	R4. 2	ステファン・ベルガー、橋本伸也訳・解題「右翼ポピュリズムと格闘する—どんな種類の民主主義のためのいかなる歴史記憶か？」	橋本伸也
思想	1	R3. 7	フロイトにおける彫像の思想—精神分析と考古学—	上尾真道
経済史研究	1	R3. 11	港湾の構築と国家の変容：「長い 18 世紀」イギリスと議会制定法	坂本優一郎

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画
なし

13. 次年度の経費
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果は、単に個々の班員の研究を集成するのではなく、「人文学 beyond 2020」という統一テーマに関連づけられる個別研究を選択し、それらが総体としていかなる問題提起をしようとするものかを本格的な総論を付すかたちの論集のかたちをとるべきと考えている。具体的には、2022年1月より出版社との相談を開始し、論集企画の精緻化に向けて鋭意検討中である。また、本研究班に関連するトピックを人文研アカデミーの企画としてとりあげることも計画されている。さらに、ウクライナ戦争やコロナ禍についてのジャーナリズムにおける班員の発信も、研究成果公表の一環といえる。